

八十翁

おきな

中村 龍介

その昔、よく歌った童謡の中に『船頭さん』というのがある。

村の渡しの船頭さんは 今年六十のお爺さん
年をとつてもお船を漕ぐときは 元氣いっぱい櫓がしなる
ソレ ギッチラギッチラ ギッチラコ

一九四一年に発表された戦時歌謡。戦いに赴く高齢者を鼓舞する歌詞となっている。当時の感覚からは、六十歳は立派なお爺さんで戦争に行くのは酷だった。だから、船頭さんを引き合いに出して、励ましているのだ。

私はこの九月末で満八十歳になる。六十で立派なお爺さんなら、八十は一体、何なのだろう。思いつく言葉の中では「翁」がある。ウイキペディアの解説では「翁は年取った男。老人を親しみ敬って呼ぶ語。他人を呼ぶ時に使うと敬う意味になり自身を指して使うとへりくだる意味になる」とある。実に便利な言葉ではないか。

さて、八十翁となった私は残り少ない人生をどのように過ごしていけばいいのか。それを考えるためには、私がこれまでの八十年をどのように生きてきたのが問われる。

昔から、人生を四季になぞらえて、四段階に分けて論ずることがある。最古の思想では、古代中国の四元論だろうか。それによると、人生は「青春、朱夏、白秋、玄冬」の四段階に分かれるとされる。もっとも、「玄冬」は死後の世界だというから、厳密には三段階だ。

「青春」は日本語としても普通に使われる言葉だ。が、「朱夏」と「白秋」については少し説明を要する。夏が朱（赤）、秋が白というのは、木の葉、火、雪といった、何か特定の物質の色を指しているわけではなく、イメージとしての色だとされる。ある人の推測では、最初は青光りする鉄を熱していくと赤くなり、もっと熱すると白くなり、そして冷めると黒くなる状態をイメージしているとか。尚、「玄」は「玄人（くろうと）」というように、色としては黒だ。

次に、青春、朱夏、白秋の年齢構成はどうかという疑問が残るが、そもそも何千年も前の人間の寿命に現在の年齢構成を当てはめても

意味がない。要は、鉄が真っ赤に熱せられた後の段階が「白い秋」なのだ。

これまでの考察から、八十翁の私は、凶々しくも、現在、人生の「白秋」の段階に在ると宣言させていただく。私の朱夏は、恐らく私が会社生活での現役を引退した十七年前に幕を閉じ、それから、白秋に入ったのだ。私の人生を登山に例えると、頂上に着くまでは、周囲を見渡す余裕もなくひたすら登り続けた。そして、十七年前に頂上を極めたのだ。それから後は下り坂の人生だ。焦ることはない。周囲を見渡しながら、ゆっくり降り降りて行けばいい。

そして、出来れば、フレイルや認知症にも罹ることなく、十年後ぐらいに玄冬に引き渡すことが出来れば本望なのだがー。

【二〇二〇年九月記 原稿用約四枚 課題「白い秋」】